

小樽を応援小説自費出版

多喜二に感銘 川崎から移住・三浦さん



小樽を応援する小説を自費出版した三浦さん

小樽市稲穂の主婦、三浦群来さん(56)が小樽を舞台にした小説「Invitation on」(インビテーション)を自費出版し、じわりと注目を集めている。3部作のうち第2部まで刊行。小樽好きが高じて川崎市から移住してきた三浦さんは「大好きな小樽を応援するために初めて書いた。本を読んでも小樽を訪れる人が増えたらうれしい」と話している。

(谷本雄也)

三浦さんは25年ほど前に小樽ゆかりの作家小樽多喜二が雪について記した書簡の一部を読み、小樽への憧れを持った。その後は神奈川県で会社員として働きながら毎年のように小樽を訪れ、愛着を深めていった。しかし、2012年に脳出血で倒れた。当時は体がうまく動かせず、茶を飲むときにこぼしてしまうこともあった。パソコンのキーは打てた

地元を舞台「読んで訪れる人増えて」

め、好きな小樽の住宅情報などを調べていた。14年に2回目の脳出血となり、「次はダメかもしれない」と移住を決意。15年末で退職し、小樽雪あかりの路の開幕に間に合うよう16年2月に川崎市から夫と移ってきた。

小樽の魅力を伝える方法を考える中で「物語にしよう」と決意。執筆経験は無かったが、約10カ月かけて小説を書き上げ、昨年8月に第1部を2千部、今年5月に第2部を千部出版した。

小説は小樽を舞台に親子3人の絆や恋愛模様を描く。父親は小樽商科大出身で応援団に所属していたという設定。1部で水天宮からの眺望や塩谷のゴロタの丘、2部で小樽商大と北大の応援団による応援合戦「対面式」なども描かれ、写真も載せている。

完結編の第3部は来年3月に刊行する予定で、小樽商大の図書館で執筆に励んでいる。三浦さんは「小樽が元気になればという願いを込めてペンネームも『群来』とした。少しでも魅力が伝わればと話している。A5判。第1部が1677円で千円、第2部が1845円で1300円。JR小樽駅の駅なかマート「タルシエ」などで販売している。